

『理趣経』抄訳ノート

著名な密教研究者の『理趣経』現代語訳をいくつか拝読した。残念ながら、また大変失礼ながら、いずれも言葉や文章の表現はたしかに現代風になっているが、現代日本語の言葉や文章としては大変ぎこちなく、何を言っているのか意味がよくわからない。あるいは、その現代風の文の表現が正確に原文の意味を表しているのか、現代風にしたためかえって原意をそこねていないか、などと疑問を感じた。

しかし、それは著者のせいではない。そもそも、日本語そのものが仏典を「わかる現代語」に言い換えることにとっても不向きなのである。従って、現代語になった『理趣経』のみならず、よく書店で見かける『般若心経』や『法華経』をはじめ『国訳大蔵経』や宗祖大師の『空海全集』などに至るまで、仏典の現代語訳はそのほとんどが字や文は読めても仏教や密教を専門的に勉強した人でなければ(註を見ながらでも)その内容が容易に呑み込めないものなのである。

この「抄訳ノート」は、そうした現代語訳の問題点を頭に置きながら、『理趣経』をできれば未学の人にもわかるように私訳してみたものである。『理趣経』には、『金剛頂経』系の密教教義が重なるので、教義にかかわるところは依然難解なものではあるが、全体を大学(カレッジ)の風景に、あるいは『理趣経』特別セミナーの風景にアレンジするなど、イメージしやすいように工夫してみた。

I ダイヤモンド・カレッジ(金剛大学)

- ここは、「ダイヤモンド・カレッジ(金剛大学)」という学び舎で、『金剛頂経』系の密教を学ぶ仏教大学です。
- この学び舎の所在地は、金剛界マンダラです。
- 経営母体は、密教法人「ビルシャナ学園」です。理事長は、学長の毘盧遮那(ビルシャナ)博士です。
- この大学には九つのキャンパスがあり、「九会(くえ)キャンパス」と言っております。
 - ①「成身会(じょうじんね)」キャンパス
 - ②「三昧耶会(さんまやえ)」キャンパス
 - ③「微細会(みさいえ)」キャンパス
 - ④「供養会(くようえ)」キャンパス
 - ⑤「四印会(しいんね)」キャンパス
 - ⑥「一印会(いちいんね)」キャンパス
 - ⑦「理趣会(りしゅえ)」キャンパス
 - ⑧「降三世会(ごうさんぜえ)」キャンパス
 - ⑨「降三世三昧耶会(ごうさんぜさんまやえ)」キャンパス成身会キャンパスが、大学全体の教育・教務・事務ほかのセンター業務を担っています。
- 学部は、「仏(如来)学部」「金剛学部」「宝学部」「蓮華学部」「羯磨(かつま)学部」の五学部で、『金剛頂経』系の「五智」「五仏」「五部」を学びます。
 - 「仏(如来)学部」は、「法界体性智(ほっかいたいしやうち)」(後述)や、大日如来(ここではビルシャナ学長)と仏(如来)部の諸尊・徳性について研究します。
 - 「金剛学部」は、「大円鏡智(だいえんきやうち)」(後述)や、阿閼如来(ここでは教授)と金剛部の諸

尊・徳性について研究します。

- 「宝学部」は、「平等性智(びょうどうしやうち)」(後述)や、宝生如来(ここでは教授)と宝部の諸尊・徳性について研究します。
- 「蓮華学部」は、「妙観察智(みょうかんざつち)」(後述)や、阿弥陀如来(ここでは教授)と蓮華部の諸尊・徳性について研究します。
- 「羯磨学部」は、「成所作智(じやうしよさち)」(後述)や、不空成就如来(ここでは教授)と羯磨部の諸尊・徳性について研究します。

●「成身会」キャンパスには、「月輪(がちりん)」と言われる次の円形の建物があります。

- 中央の大きな「月輪」は、学長を中心に、学長を補佐する金剛波羅蜜・宝波羅蜜・法波羅蜜・業波羅蜜の「四波羅蜜(しはらみつ)」の教務主任がいる「教務部」で、それぞれ金剛学部・宝学部・蓮華学部・羯磨学部の教務主任をしています。また、学長補佐主任の金剛薩埵(こんごうさつた)准教授も必要に応じてここに詰めています。
- 東側の「月輪」は金剛学部で、学部長の阿閼(あしやく)教授を中心に、金剛喜・金剛愛・金剛薩埵・金剛王の「四親近(ししんごん)」の准教授が研究室をもっています。
- 南側の「月輪」は宝学部で、学部長の宝生(ほうしやう)教授を中心に、金剛光・金剛笑・金剛幢・金剛宝の「四親近」の准教授が研究室をもっています。
- 西側の「月輪」は蓮華学部で、学部長の阿弥陀(無量寿)教授を中心に、金剛法・金剛利・金剛語・金剛因の「四親近」の准教授が研究室をもっています。
- 北側の「月輪」は羯磨学部で、学部長の不空成就(ふくうじやうじゆ)教授を中心に、金剛牙・金剛業・金剛護・金剛拳の「四親近」の准教授が研究室をもっています。

このほか、上記の四方の「月輪」の間にさらに四つの「月輪」があり、

- 東南に、専任講師の金剛嬉(こんごうき)の研究室、南西に同じく金剛鬘(こんごうまん)の研究室、西北に同じく金剛歌(こんごうか)の研究室、北東に同じく金剛舞(こんごうぶ)の研究室と、「内四供養(ないしくやう)」の女性専任講師の研究室です。

さらに、以上の建物群の外側の四隅に、

- 火神・水神・風神・地神の「四神」門護がいて、キャンパスの安全を護っています。

加えて、その外側の枠の四隅、

- 東南に専任講師の金剛香の研究室、南西に同じく金剛華の研究室、西北には同じく金剛灯の研究室、北東に同じく金剛塗(こんごうづ、=金剛塗香)の研究室と、「外四供養(げしくやう)」の女性専任講師の研究室になっています。

また、同じ外側枠の四方、

- 東側に東門守衛の金剛鉤(こんごうこう)の控え室、南側に南門守衛の金剛策(こんごうさく)の控え室、西側に西門守衛の金剛鎖(こんごうさ)の控え室、北側に北門守衛の金剛鈴(こんごうれい)の控え室と、「四摂(ししやう)」(四門護)の守衛の控え室があります。

そして、同じ外側枠の全体は図書館のようになっていて、

- 客員講師の「賢切(けんごう)の千仏」が控え、書籍の代りになって学生に教えています。

加えて、キャンパスの一番外側の四方には、

- 客員講師のヒンドゥー教の神々(外金剛部の護法善神)、二十尊の研究室があります。

●「三昧耶会」キャンパスは、「成身会」キャンパスと同じ建物配置で、「月輪」と言われる円形の建物の教室には、「成身会」の先生方各々を象徴するシンボル(「三昧耶形」)の金剛杵や蓮華や利剣や輪宝や金剛鈴などが飾られていて、学生たちはそれを具に見ながら、それに関する研究を行います。

このキャンパスは金剛学部が使用しています。

- 「微細会」キャンパスは、「成身会」キャンパスと同じ建物配置で、「月輪」と言われる円形の建物の教室には、ビルシヤナ学長の堅固にして微細なサトリの智慧のシンボルの「三鉢杵」が飾られていて、学生たちはそれを具に見ながら、それに象徴されるビルシヤナ学長の堅固なサトリの智慧に関する研究を行います。このキャンパスは金剛学部が使用しています。
- 「供養会」キャンパスは、「成身会」キャンパスと同じ建物配置で、「月輪」と言われる円形の建物のそれぞれの各研究室において、各先生方が各自の「三昧耶形」を蓮華の上に乗せ、それを両手で奉じ持ち、相互供養を行うところで、学生たちもこれに参加し相互供養の研究を行います。このキャンパスは宝学部が使用しています。
- 「四印会」キャンパスは、「成身会」「三昧耶会」「微細会」「供養会」の四キャンパスでの研究が、一度に簡略化・要約化してできるところです。このキャンパスはいろいろな学部が使用しています。
- 「一印会」キャンパスは、各キャンパスにおける研究が総合的・一元的にできるところです。このキャンパスはいろいろな学部が使用しています。
- 「理趣会」キャンパスは、『理趣経』（「大楽」「大欲」の法門、般若理趣など）を専門に研究するところです。このキャンパスは蓮華学部が使用しています。
- 「降三世会」キャンパスは、『金剛頂経』や「金剛界マンドラ」の研究を怠ったり放棄したりする学生を改心させ、研究に専心させる指導を行うところです。「成身会」キャンパスと同じ配置の建物に明王系の先生方が加わり、「忿怒」の形相で菩薩の大悲利他の指導にあたっています。このキャンパスは羯磨学部が使用しています。
- 「降三世三昧耶会」キャンパスには、「降三世会」キャンパスの先生方を象徴する「三昧耶形」が飾られていて、学生たちはそれを具に見ながら、「忿怒」（怒りの形相や方法で諸魔・外道を調伏し仏道に導く）の深い意味を研究します。このキャンパスは羯磨学部が使用しています。
- 学長は毘盧遮那博士（法身大日如来）です。

「法界体性智（ほっかいたいしやうち）」という「絶対智」（サトリの智慧）の当体であり、大乘の「空」を実相とする「法界」をその身体とする毘盧遮那博士は、「大円鏡智」という阿閼如来教授（金剛部）のサトリの智慧と、「平等性智」という宝生如来教授（宝部）のサトリの智慧と、「妙観察智」という阿弥陀如来教授（蓮華部）のサトリの智慧と、「成所作智」という不空成就如来教授（羯磨部）のサトリの智慧（以上、四仏（四部）の四智）を具えています。

※「大円鏡智」：金剛智（こんごうち）とも言い、きれいにみがかれて「一切（諸）法」を映す大きな円い鏡のように、清浄無垢で、一点のくもりもない、堅固な、サトリの智慧。唯識（ゆいしき）で言うアーラヤ識（第八識）が転じて智慧になったもの（「転識得智」）。

※「平等性智」：灌頂智（かんじやうち）とも言い、（サトリの境地では）「一切（諸）法」が「無自性」「空」であるから、自己も他者もなく無差別平等、衆生（生）と如来（仏）の別なく「生仏不二」であると見る智慧。唯識で言うマナ識（第七識）が転じて智慧になったもの。

※「妙観察智」：蓮華智（れんげち）・転法輪智（てんぽうりんち）とも言い、この娑婆世間で煩惱と迷妄に生きる衆生を正しく観察し、仏道に導き入れる説法（転法輪）の智慧。唯識で言う意識（第六識）

が転じて智慧になったもの。

※「成所作智」：羯磨智(かつまち)とも言われ、大悲によって衆生済度の「利他行」を実践する智慧。唯識で言う前五識(眼識・耳識・鼻識・舌識・身識)が転じて智慧になったもの。

- 学生は、八億人からの菩薩たちです。

※「八億」ですが「八十億」という説もあります。

- この「ダイヤモンド・カレッジ」では、毘盧遮那学長が、始めもなく終りもなく、常に講義をし続けていて、教授・准教授・講師たちはその専門専門の分野で、学長の講義を学生に教えています。みんなが一致して聞きたいことがあれば、学長の「特別セミナー」が開かれます。

II 特別セミナー「般若理趣—愛欲は菩薩の心位—」

- ある時、教授・准教授・講師たち及び学生みんなの一致した希望で、学長の「常恒」の講義のなかから「般若理趣—愛欲は菩薩の心位—」というテーマの特別セミナーが行われました。

- 場所は「理趣会(りしゅえ)」キャンパスです。

メイン会場は摩尼宝(まにほう)で飾られた「他化自在天(たげじざいてん)」の大摩尼殿のようなホールです。摩尼宝とは、水晶・瑠璃(るり)・琥珀(こはく)・瑪瑙(めのう)・摩尼(宝珠)の「五宝(ごほう)」のことで、「五宝」は「五智(ごち)」の象徴です。

また、この大教室は八本の柱(「八柱(はっちゅう)」)でできています。「八柱」は「八葉(蓮台)(はちよう(れんだい))」の象徴で、すなわち胎蔵(たいぞう)曼荼羅「中台八葉院(ちゅうたいはちよういん)」の大日・宝幢(ほうどう)・開敷華王(はいふけおう)・無量寿(むりょうじゅ)・天鼓雷音(てんくらいおん)の「五如来」と、普賢(ふげん)・文殊・観自在・弥勒の「四菩薩」を意味します。

- この「理趣会」キャンパスで十七の会場に分れ、准教授の金剛薩埵をはじめ、観自在・虚空蔵(こくうぞう)・金剛拳(こんごうけん)・文殊師利(もんじゅしり)・纒発心転法輪(さいほつしんてんほうりん)・虚空庫(こくうこ)・摧一切魔(さいいっさいま)といった「理趣会」キャンパスの客員・特任准教授たちが主導して行われました。参加者は、毘盧遮那学長のほか教授・准教授・講師たち、そして八億の学生たちでした。

- セミナーの冒頭、毘盧遮那学長の基調講演があり、今回のテーマの元となる『般若理趣経』の概要についてご教示がありました。

○先ず、『理趣経』の正式な経題『大楽金剛不空真実三摩耶経』『般若波羅蜜多理趣品』についてですが、

—「大楽」(「金剛薩埵」のサトリの境地と大悲利他の実践における(相対的でない)絶対的な安楽)と、それ(「大楽」)が「金剛」(ダイヤモンドのように堅固なもの)であり、また「不空」(世間に「利益」(福德)をもたらすもの)であり、また「真実」(「一切如来」(五仏)のサトリの智慧(「五智」)にかなったもの)であり、そして「三摩耶」(衆生と仏ともに「等持」(平等摂持、生仏不二)であることを説く経の、般若波羅蜜多(サトリ(到彼岸)の智慧)の理趣(道理)を説く章—

という意味であり、弘法大師(『理趣経開題』)によれば、

「大楽」=大日如来のサトリの智慧=「金剛薩埵」の境地=「法界体性智」・仏部。

「金剛」＝堅固な「菩提心」＝阿閼如来＝「大円鏡智」・金剛部。

「不空」＝世間に「利益」(福德)を施す(もたらす)＝宝生如来＝「平等性智」・宝部。

「真実」＝一切如来の「教法」にかなっていること＝阿弥陀如来＝「妙觀察智」・蓮華部。

「三摩耶」＝衆生と仏ともに「等持」(平等撰持、生仏不二)であること＝不空成就如来＝「成所作智」・羯磨部。

と、「五智」「五仏」「五部」による解釈がハッキリしている、と。

また、「般若理趣」とは、大乘の「般若波羅蜜多」(サトリの智慧＝「無自性」「空」)の密教的「道理」(密教教義化)であり、それはすなわち、一語にして言えば(密教の菩薩「金剛薩埵」の)「大樂」の法門、その内実は第十七段に説かれる「大欲」「大樂」「大菩提」「摧大力魔」「遍三界自在主」の「五秘密」、そして具体的には各段のテーマ(「釈義」の部分)十七例である、と。

○次いで、『理趣経』が言う「一切如来」とは、『理趣経』を不空が註釈した『理趣釈』が言うように、「五仏」(大日・阿閼・宝生・阿弥陀・不空成就)の総称であること。

○次いで、「一切(諸)法」の意味について、これをほとんどの仏教研究者が「すべての存在」であるとか「ありとあらゆるモノゴト」とか「事物・事象」といった意味の訳語に言い換えているが、「一切」とは単に「すべて」とか「ありとあらゆる」ではなく、具体的に釈尊が説いた「十二縁起」の「十二」のことであり、世親(『俱舍論』)が言った「五位七十五法」の「七十五」であり、唯識が言った「百法」の「百」のこと。

また「法(ダルマ)」とは、「存在」「存在するもの」でもなく「モノゴト」「事物・事象」でもなく、「(私たちが観想中に観ずる)観念の持続不変の基体とみなされるかたちや性質(属性)」を言う、と。

○また、『理趣経』で特徴的な「清浄」ということについて、ある著名な密教学者の見解を借りれば、「自他の区別を超えた、自他平等」のこと、衆生(生)と如来(仏)ともに平等(生仏不二)ということであるが、元をただせば「一切皆空」ということ。『理趣経』が説く「愛欲」の「(自性)清浄」とは、私たちが瞑想修行やサトリの障害になると言って抑滅すべきと考えてきた煩惱(法)がもともと「無自性」「空」であり、純粋な生命活動であって、それに私たちが妄執するから汚れと見てしまうのだ、と。

○そして、今も出てきた「平等」とは、衆生(生)と如来(仏)ともに自他平等(生仏不二)であるということ。弘法大師(『理趣経開題』)は「等持」(平等撰持、入我我入)と釈している、と。

【十七講座の概要】

●第一講座：「大樂」(金剛薩埵准教授の菩薩の境地)について

講師：(金剛薩埵准教授の境地に入った)ビルシャナ学長

この講座では、一私たちは衆生・凡夫・有情(うじょう)・世間と表現される者＝は日常、「一切(諸)法」(観念的に保持される、あらゆる認識対象の)特性(属性)を、それ自体で生滅をくり返し自存している実在(仏教では「実有」)だと錯覚し、自分と「(諸)法」という自他の分別意識をもち、その分別意識＝我執にとらわれ生きている。その我執のものは煩惱(本能的な生命欲、欲も「(諸)法」の一つ)で、その煩惱の雲によって「(諸)法は一切皆空」という真実相が覆われてしまい、サトリの妨げになるので瞑想修行によって抑滅・除去すべきであると大乘までの仏教は言ってきた。しかし密教は、「(諸)法は自性(本性)が清浄である」＝すなわち「私たちの煩惱(本能的な生命欲)も清浄である」から抑滅・除去するのでは

なく、肯定的に昇華すべきものとする—ということについて、煩惱の代表格である「愛欲」をテーマに、それが雑染ではなく「清浄」であって、金剛薩埵すなわち密教の菩薩の境地では「大楽」((世間的な、精神的・身体的(=相対的)な安楽ではない、絶対的な安楽)のステージになることを学びました。

具体的には、次の「十七の愛欲」事例が挙げられ、その「(本来)清浄」が説かれました。

- ①「妙適(みょうてき)」:(異性と)性的な恍惚の快樂。
- ②「欲箭(よくせん)」:男女が互いに放つ愛欲の矢。
- ③「触(しよく)」:(肌と肌を合わせて)触れ合うこと。
- ④「愛縛(あいばく)」:愛欲によって互いに縛られること。
- ⑤「一切自在主(いっさいじざいしゅ)」:(愛し合い、許し合い)すべてが自由自在なこと(に増上すること)。
- ⑥「見(けん)」:(愛欲の対象としてお互いを)見ること。
- ⑦「適悦(てきえつ)」:(愛欲の快感に)満悦した悦び。
- ⑧「愛(あい)」:(食りに似た)渴愛。
- ⑨「慢(まん)」:(愛欲の快樂を)自慢に思うこと。
- ⑩「莊嚴(そうごん)」:(愛欲によって)身体を飾ること。
- ⑪「意滋澤(いじたく)」:(愛欲が満たされて)心が爽快になること。
- ⑫「光明(こうみょう)」:(愛欲が満たされて、心に)明るい光がさすこと。
- ⑬「身楽(しんらく)」:(愛欲が満たされた)身体的な悅樂。
- ⑭「色(しき)」:(性愛における互いの)容姿。
- ⑮「声(せい)」:(性愛の悦びの)声。
- ⑯「香(こう)」:(性愛で互いにわかる)匂い。
- ⑰「味(み)」:(性愛で体感する)味わい。

- ①「妙適」清浄の境地について、金剛薩埵准教授が発言し(『理趣釈』の説)、
 - ②「欲箭」清浄についても、金剛薩埵准教授が(以下、大師の『真実経文句』の説)、
 - ③「触」清浄については、金剛王准教授が、
 - ④「愛縛」清浄については、金剛愛准教授が、
 - ⑤「一切自在主」清浄は、金剛喜准教授が、発言しました。
- また、
- ⑥「見」清浄については、金剛嬉准教授が、
 - ⑦「適悦」清浄については、金剛鬘准教授が、
 - ⑧「愛」清浄については、金剛歌准教授が、
 - ⑨「慢」清浄については、金剛舞准教授が、
- さらに、
- ⑩「莊嚴」清浄については金剛華准教授が、
 - ⑪「意滋澤」清浄については金剛香准教授が、
 - ⑫「光明」清浄については金剛灯准教授が、
 - ⑬「身楽」清浄については金剛塗准教授が、
- そして、
- ⑭「色」清浄については金剛鉤准教授が、
 - ⑮「声」清浄については金剛策准教授が、
 - ⑯「香」清浄については金剛鎖准教授が、
 - ⑰「味」清浄については金剛鈴准教授が、それぞれ発言しました。

その発言の内容を例示すれば、

①の「妙適」を、金剛薩埵准教授は、「(異性と)性的な恍惚の快樂は(本来)「清浄」である」という句は、すなわち密教の菩薩の境地(心位)である」と。

すなわち、大乘までの仏教がサトリの障害になるものとして抑滅し否定してきた人間の煩惱(本能的な生命欲)は、元をただと本来純粹無垢(清浄)なものであって、「愛欲」そのものも人間の純粹な生命の営みだとすれば、それは菩薩が衆生を愛護救済しなければいけない本能的な純粹な希求(「大慈悲心」と変わりなく、すなわちそれは「煩惱即菩提」であると密教は断じたということ。ちなみに、「煩惱即菩提」を象徴するように、マンダラには仏の姿となった人間の煩惱が数々描かれています。

これらは、原始仏教や部派仏教の時代から説かれていた「心性本浄」や、大乘が言った「仏種(ぶつしゅ)」「必有仏性(ひつうぶつしょう)」「如来蔵(にょらいぞう)」「菩提心(ぼだいしん)」などを受け継ぎ、「本来成仏」→「自性清浄」と昇華した思想的深化です。

講座の最後に、「大樂」が「金剛」のように堅固(なサトリの智慧)であり、世間に「利益」(福德)をもたらすものであることを表現する「卍引(うーん)」という真言(金剛薩埵准教授の種字(しゅじ))が、金剛手講師によって説かれました。

●第二講座:「五智」の内、「四智」の「四平等」(学長ビルシャナの境地)について

講師:学長(自受用身=智法身=説法する法身として)

この講座は、学長の昆盧遮那博士と(阿闍・宝生・阿弥陀・不空成就の)「四仏」のサトリの智慧(「四智」)は、(衆生と仏の双方に)平等(=生仏不二)であることを学びました。

その要旨は、「四平等」、

①「金剛」平等:阿闍教授のサトリの智慧である「大円鏡智」は、「金剛」(のように堅固であること)が(衆生と仏の双方に)平等(生仏不二)であること(金剛学部の研究対象)。

②「義」平等:宝生教授のサトリの智慧である「平等性智」は、「利益」(福德)が平等であること(宝学部の研究対象)。

③「法」平等:阿弥陀教授のサトリの智慧である「妙観察智」は、(説法される)「教法」が平等であること(蓮華学部の研究対象)。

④一切「業」平等:不空成就教授のサトリの智慧である「成所作智」は、(大悲による)「利他行」が平等であること(羯磨学部の研究対象)。

講座の最後に、「一切(諸)法」は本来(衆生と仏の双方に)平等(生仏不二)であるということを表現する「嚧引・重呼(あーく)」という真言(ビルシャナ学長の種字)が、学長自らによって説かれました。

●第三講座:五種の「無戯論性」(降三世特任教授の境地)について

講師:(阿闍教授と同体の)釈迦牟尼客員教授(調伏難調釋牟尼如来)の境地に入り、降三世特任教授の姿に変身した学長

この講座は、降三世特任教授のサトリの境地である五種の「無戯論性」によって、釈迦牟尼客員教授の「調伏(折伏・化導)」の境地では(貪・瞋・痴の)「三毒」も(本来)「無戯論性」であることを学びました。

「無戲論性」の「戲論(けろん)」とは、私たちが日常、「一切(諸)法」を自分(「我」(我執))を中心に自他对別的に分別(妄執)することを言い、その否定形である「無戲論」とは、自他对別を超えた自他平等の「無分別」・「空」=「清浄」の境地を言います。

その要旨は、「五種無戲論」、

- ①欲無戲論性:代表的な煩惱の「食欲」(貪り)は本来「清浄」である、という無戲論性。(金剛薩埵准教授の境地)。
- ②瞋無戲論性:代表的な煩惱の「瞋恚」(怒り)は本来「清浄」である、という無戲論性。(金剛王准教授の境地)。
- ③癡無戲論性:代表的な煩惱の「愚痴」(無知)は本来「清浄」である、という無戲論性。(金剛愛准教授の境地)。
- ④一切法無戲論性:「一切(諸)法」も本来「清浄」である、という無戲論性。(金剛喜准教授の境地)。
- ⑤般若波羅蜜多無戲論性:(私たちが煩惱で執着する)般若波羅蜜多も本来「清浄」である、という無戲論性。

講座の最後に、金剛手講師が降三世明王の「印」(手印)を結び、(諸魔を)降伏して立つ姿となって、「金剛吽伽羅」(ヴァジュラ・ウン・キャラ)の「吽短(うん)」という真言(降三世明王の種字)を説きました。

この「特別セミナー」の各講座の講師(『理趣経』の各段の教主)構成からすると、この講座から第六講座までは「四仏」が講師となるのが本来で、従ってこの講座は阿闍教授が講師になるべきところ釈迦牟尼客員教授が代行しました。

これについては、釈尊が尼連禪河(ガンジス川の支流、ビハール州ブッダガヤの東を流れるバルガ川)河畔の菩提樹下でサトリをひらかれた(成道の)時、阿闍如来が「触地印」(降魔印)を結んで魔王を退散させた(降魔)というエピソードに由来するという説がありますが、私の知る限りでは、大地に右手を触れ(触地)、大地をゆるがして女神を湧出させ、修行の邪魔をする魔王を退けたのは釈尊自身で(『ラリタヴィスタラ(大遊戯経)』)、この「触地」の手の形がやがて「降魔」すなわち「自らの煩惱を克服する」象徴として「触地印」「降魔印」と呼ばれるようになり、この「降魔」の「触地印」の釈尊が密教で阿闍如来になった、すなわち「降魔」の釈尊と阿闍如来は同体と承知しております。

●第四講座:「一切(諸)法」の四種「清浄」(観自在客員准教授の境地)について
講師:阿弥陀教授(得自性清浄法性如来)の境地に入り、観自在客員准教授の
姿に変身した学長

この講座は、「一切(諸)法」は自性「清浄」で雑汚などないことなど、観自在客員准教授のサトリの境地である「四種清浄」を学びました。

『理趣経』が言う「清浄」とは、言い換えれば、仏教が言う「障礙」「罣礙」「蓋障」(サトリの障害となるもの)がないこと、思想的には「空」であること、「我」(我執)がないこと、自他の対別を超えた自他平等の境地(松長有慶博士)のことです。

その要旨は、「四種清浄」、

- ①あらゆる「食欲」は「清浄」であるから、あらゆる「瞋恚」(怒り)は「清浄」であるということ。(金剛法准教授の境地)。

- ②あらゆる(心の)「垢」(汚れ)は「清浄」であるから、あらゆる罪業は「清浄」であるということ。(金剛利准教授の境地)。
- ③「一切(諸)法」は「清浄」であるから、あらゆる衆生・凡夫は「清浄」であるということ。(金剛因准教授の境地)。
- ④「一切智」のなかの(最上の)「智」は「清浄」であるから、般若波羅蜜多は「清浄」であるということ。(金剛語准教授の境地)。

講座の最後に、一切の衆生の種々の姿や形を表現する「紇利二合引入(きりーく)」という真言(観自在特任准教授の種字)が、観自在特任准教授によって説かれました。

●第五講座:四種の「施し」とその「利益」(虚空蔵客員准教授の境地)について
 講師:宝生教授(一切三界主如来)の境地に入り、虚空蔵客員准教授の姿に
 変身した学長

この講座は、虚空蔵客員准教授のサトリの境地である四種の「施し」とその「利益」について学びました。

その要旨は、「四種施」、

- ①「灌頂(かんじょう)施:「灌頂」の際に、阿闍梨(師)が受者(弟子)の頭上にかぶせる「五智の宝冠」によって開顕された「五智」を受者に施すことにより、宝生如来の境地に入る。(金剛宝准教授も境地)。
- ②「義利」施:「比丘」・「沙門」等の出家修行者に金銭や資具など(財施)の「利益」を施すことにより、すべての「意願」(心の願い)を満足させる。(金剛光准教授の境地)。
- ③「法」施:「天龍八部衆」(護法善神・ヒンドウの鬼神)に「教法」(仏法)を施すことにより、すべての「教法」を会得させる。(金剛幢准教授の境地)。
- ④「資生」施:「畜生道」にさまよう衆生・凡夫に飲食や物資を施すことにより、身・口・意(「三業」)の安楽を得させる。(金剛笑准教授の境地)。

講座の最後に、すべての「灌頂」を「本誓(ほんぜい)」(もとからの誓願、本願)とする「怛覽二合引(たらん)という真言(虚空蔵客員准教授の種字)が、虚空蔵客員准教授によって説かれました。

●第六講座:四種の「智印」(金剛拳特任准教授の境地)について
 講師:不空成就教授(得一切如来智印如来)の境地に入り、金剛拳特任准教授
 の姿に変身した学長

この講座は、金剛拳特任准教授のサトリの境地、すなわち四種の「智印(ちいん)」(智慧の表象)によって、(真言行者が)「一切如来」(「五仏」)の身・口・意(の「三密」と「金剛」の表象(「印」=「曼荼羅」)を持することは「一切如来」の身・口・意と平等(生仏不二)になることであることを学びました。

その要旨は、「四種(智)印」、

- ①「一切如来」の身体的な表象(「印」=「手印」)を持すること=「一切如来」の身になること。「身密印」=大曼荼羅。(金剛業特任准教授の境地)。

- ②「一切如来」の言字的な表象(「印」=真言・種字)を持すること=「一切如来」の(説法の)「教法」を得ること。「語密印」=法曼荼羅。(金剛護特任准教授の境地)。
- ③「一切如来」の心意的な表象(「印」=観想)を持すること=「一切如来」の「三摩地」を証すること。「意密印」=三昧耶曼荼羅。(金剛薬叉特任准教授の境地)。
- ④「一切如来」の(身・口・意の)「金剛」のように堅固な表象(「印」=尊像)を持すること=「一切如来」の身・口・意の最上の悉地。「三密印」=羯磨曼荼羅(立体曼荼羅)。(金剛拳特任准教授の境地)。

講座の最後に、すべての「金剛」のように堅固な「印」の成就を「本誓」とする、それ自体が真実の「唵(あく)」という真言(金剛拳特任准教授の種字)が、ビルシャナ学長によって説かれました。

●第七講座:「転字輪観」と「無相平等」(文殊師利客員准教授の境地)について
講師:一切無戲論如来の境地に入り、文殊師利客員准教授の姿に変身した学長

この講座は、文殊師利客員准教授の「転字輪観」によって、第三段で「三毒」を「調伏」した(釈迦客員教授=阿閼教授=)金剛薩埵准教授のサトリである「無相平等」の「菩提心」を学びました。

「転字輪観」とは、文殊菩薩の象徴である「五字真言」(ア(a)・ラ(ra)・ハ(pa)・シャ(ca)・ノウ(na))の字義を順逆に転じて観想する観法。「五字真言」の字義とは、「ア(阿)字諸法本不生」、「ラ(囉)字清淨無染着」、「ハ(波)字第一義諸法平等」、「シャ(者)字諸法無有諸行」、「ノウ(那)字諸法無有性相」です。

「ア(阿)字諸法本不生」:

「ア(阿)a」字とは、サンスクリットアルファベットの最初の言字。密教はこの「ア(阿)a」字をもって「(諸)法」の本初とします。「(諸)法」はコトバや文字になってはじめて「存在」たり得る、「はじめに、ロゴスありき」です。そう密教は見ました。また、「(諸)法」はさまざまな縁によって生ずるものであるから、自らそれ自体で自存するのではなく非自存=「不生 anutpāda」で、「(諸)法」の本源の「ア(阿)a」字は「本不生」ということとなります。

「ラ(囉)字清淨無染着」:

『金剛頂經釈字母品』に「囉字門と稱するは、一切法は諸塵染を離れ」と説かれ、『大日經』二に「囉字門は、一切諸法は一切の諸塵染を離れ」と説かれ、『涅槃經』八には「囉は、能く貪欲・瞋恚・愚痴を壊し、眞實の法を説く」と説かれるように(『密教大辞典』)、「ラ(囉)ra」字は貪欲・瞋恚・愚痴の「三毒」(諸塵染)を離れる眞實の存在であるから「清淨」「無染着」であるということ。

「ハ(波)字第一義諸法平等」:

『金剛頂經釈字母品』に「波字門と稱するは、一切法は第一義諦にして不可得」と説かれ、『大日經』二も同じく、『大日經疏』第七に「波字門は、一切法は第一義諦にして不可得」龍樹云く、第一義にして諸法実相と名づく」と説かれ、『華嚴經』には「波字を唱える時、般若波羅蜜の門に入り、普照法界と名づく」と説かれるように(『密教大辞典』)、「ハ(波)pa」字は、龍樹が言う「第一義諦」(勝義諦)・「諸法実相」、『華嚴經』が言う「般若波羅蜜門」「法界」、すなわち「(諸)法」には自他の対別がなく、平等な大乘「空」の世界。

「シャ(者)字諸法無有諸行」:

『金剛頂經積字母品』『大日經』二に「一切法は一切の遷變を離れ」とあり、『大智度論』四十八に「若し遮字を聞かば、即時に一切の諸行の皆行に非ざるを知る」と説かれ、『大日經疏』第七には「本初不生とは是れ如来之身にして、常住に安住し変易あることなきが故に遷變を離れると云う」と説かれるように(『密教大辞典』)、「シャ(者) ca」字は、「(諸)法」は「本初不生」であり眞実相として遷り変りがない、不変であるということ。

「ノウ(那)字諸法無有性相」とは、

『金剛頂經積字母品』に「曩字門と稱するは、一切法は不可得と名づく」と説かれ、『大日經』二に「此の字は、「xa」「a」「za」「ma」と共に皆大空にして證菩提の義あり」と説かれ、『守護(国界主陀羅尼)經』三には「娜字印は、名色や性相は不可得」と説かれるように、「ノウ(那) na」字は、「(諸)法」に名称や姿・形などの外形的な形相はもともと無い無相、「空」であるということ。

この「転字輪観」で観じられたその要旨は、「無相平等」、

①「(諸)法」は空性である。「無自性」と相応(合致)するが故に。

「空観」(金剛利客員准教授の境地)(初会『金剛頂經』金剛界品の金剛界曼荼羅、金剛学部の研究対象)。

②「(諸)法」は無相である。「無相」性と相応(合致)するが故に。

「無相」観(忿怒金剛客員准教授の境地)(初会『金剛頂經』降三世品の降三世曼荼羅、宝学部の研究対象)。

③「(諸)法」は無願である。「無願」性と相応(合致)するが故に。

「無願」観(蓮華利客員准教授の境地)(初会『金剛頂經』遍調伏品の遍調伏曼荼羅、蓮華学部の研究体操)。

④「(諸)法」は光明である。般若波羅蜜多が「清浄」の故に。

「光明」観(宝利客員准教授の境地)(初会『金剛頂經』一切義成就品の一切義成就曼荼羅、羯磨学部の研究対象)。

講座の最後に、文殊師利客員准教授が、重ねてこの(般若理趣の)意義を明らかにするため、微笑みを浮かべ、自らの(智慧の)剣をふるい、「一切如来」(のサトリを理解しない戯論)を切り、般若波羅蜜多の最勝の「菴(あん)」という真言(文殊師利客員准教授の種字)が説かれました。

●第八講座:「四平等」と「入曼荼羅」(纒發心轉法輪特任准教授の境地)について

講師:一切如来入大輪如来の境地に入り、纒發心轉法輪特任准教授の姿に変身した学長

この講座は、纒發心轉法輪特任准教授のサトリの境地、具体的には第四段で説かれた「一切(諸)法」(観念的(に保持される、あらゆる認識対象の)特性(属性))は本来「清浄」であり(衆生と仏の双方とも)平等(生仏不二)であるという観自在客員准教授の境地を成就する方法として、「四平等」の「曼荼羅」に入ること学びました。

その要旨は、「四平等」と「入曼荼羅」、

①「金剛」(のように堅固なサトリ)が(衆生と仏の双方とも)平等(生仏不二)である境地に入ることは、「一切如来」の「(転)法輪」(曼荼羅)に入ること。(初会『金剛頂經』金剛界品の「金剛界輪曼荼羅」)。

- ②(サトリの)「利益」が平等である境地に入るとは、偉大な菩薩の「(転法)輪」に入ること。(初会『金剛頂経』降三世品の「降三世輪曼荼羅」)。
- ③一切の「教法」が(平等である境地に入るとは、正しい「教法」の「(転法)輪」に入ること。(初会『金剛頂経』遍調伏品の「遍調伏輪曼荼羅」)。
- ④すべての「利他行」が平等である境地に入るとは、一切の「利他行」の「(転法)輪」に入ること。(初会『金剛頂経』一切義成就品の「一切義成就輪曼荼羅」)。

講座の最後には、すべての「金剛(輪)」「(転)法輪(曼荼羅)、確かなサトリの教室)に入るとを「本誓」とする「吽(うん)」という真言(纒発心轉法輪特任准教授の種字)が、纒発心轉法輪特任准教授によって説かれました。

- 第九講座:「一切如来」への「四種供養」(虚空庫客員准教授の境地)について
講師:一切如来種種供養藏廣大儀式如来の境地に入り、虚空庫客員准教授の姿に変身した学長

この講座は、虚空庫客員准教授のサトリの境地である「一切如来」に対する「四種供養」を、第五段で説かれる虚空蔵客員准教授の福德施与の境地として学びました。

その要旨は、「四種供養」、

- ①「菩提心」を發起することは、諸如来に対する広大な供養である。(金剛嬉准教授の境地、金剛学部の研究対象)。
- ②一切の衆生を救済することは、諸如来に対する広大な供養である。(金剛鬘准教授の境地、宝学部の研究対象)。
- ③仏典を受持することは、諸如来に対する広大な供養である。(金剛歌准教授の境地、蓮華学部の研究対象)。
- ④般若波羅蜜多(『=理趣経』)を受持し、読誦し、自書し、他に書写を教え、思惟し、修習し、種種の供養を行うことは、諸如来に対する広大な供養である。(金剛舞准教授の境地、羯磨学部の研究対象)。

講座の最後に、一切の「利他行」(事業)が「利益」(福德)をもたらすことを「本誓」とする、一切の「金剛」のように堅固な「唵(おん)」という真言(虚空庫客員准教授の種字)が、虚空庫客員准教授によって説かれました。

- 第十講座:四種の「忿怒」(摧一切魔特任准教授の境地)について
講師:能調持智拳如来の境地に入り、摧一切魔特任准教授の姿に変身した学長

この講座は、「忿怒」の行により、第六段に説かれる金剛拳特任准教授の(調伏・化導)活動の境地、すなわち四種の「忿怒」を学びました。

仏教で言う「忿怒」(怒り)は、不動明王に見られるように、忿怒の形相に、(煩惱を切る)利剣(三鈷劍・俱利伽羅劍)・(迷える衆生を救いとる)羅索(縄)をもって、仏道に背くもの・仏道修行の妨げになる煩惱を降伏させて仏道に導くことですが、忿怒は感情的な怒りではなく絶対的な「大悲心」から出る純粋な哀

愍の発露です。

その要旨は、「四種忿怒」、

- ①忿怒平等:「忿怒」は(衆生と仏の双方に)平等(生仏不二)である。(金剛学部の研究対象)。
- ②忿怒調伏:「忿怒」は「調伏」である。(宝学部の研究対象)。
- ③忿怒法性:「忿怒」は「法性」である。(蓮華学部の研究対象)。
- ④忿怒金剛性:「忿怒」は「金剛」性である。(羯磨学部の研究対象)。

講座の最後に、摧一切魔特任准教授が、重ねてこの般若理趣の意義を明らかにするため、微笑みを浮かべ、金剛葉叉客員准教授(忿怒形の護法神)の姿になって、金剛牙(の印)を持し、一切如来をも恐れさせ終って、金剛の(ように堅固な)忿怒の大笑いの、「郝(かく)」という真言(摧一切魔特任准教授の種字)を説きました。

●第十一講座:サトリの智慧の「四種性」(金剛手准教授の境地)について

講師:一切平等建立如来の境地に入り、金剛手准教授の姿に変身した学長

この講座は、初段～十段の「般若理趣」の総括です。金剛手准教授(=普賢客員准教授)のサトリの境地である般若波羅蜜多の「四種性」を学びました。

その要旨は、「四種性」、

- ①「一切(諸)法」(事物・事象・心理・心象など私たちの認識対象の、かたちや性質などの属性)は「平等」性の故に、般若波羅蜜多は「平等」性である。金剛界曼荼羅。(金剛学部の研究対象)。
- ②「一切(諸)法」は「義利」性(「利益」性)の故に、般若波羅蜜多は「義利」性(「利益」性)である。降三世曼荼羅。(宝学部の研究対象)。
- ③「一切(諸)法」(観念的(に保持される、あらゆる認識対象の)特性(属性))は「法性」の故に、般若波羅蜜多は「法性」である。遍調伏曼荼羅。(蓮華学部の研究対象)。
- ④「一切(諸)法」は「事業」性(「利他行」性)の故に、般若波羅蜜多は「事業」性(「利他行」性)である。一切義成就曼荼羅。(羯磨学部の研究対象)。

講座の最後に、すべての如来・菩薩の曼荼羅(三摩耶)を加持する三摩地に入って、一切の「利益」(福德)をもたらすことを「本誓」とする「吽(うん)」という真言(普賢客員准教授の種字)が、金剛手准教授によって説かれました。

●第十二講座:「四種蔵」(「外金剛部」の護法善神客員講師の境地)について

講師:ビルシヤナ学長

この講座は、「外金剛部」の護法善神(ヒンドゥーの神々)も本来仏であるという密教的な「道理」を、すべての有情の「四種蔵」性によって学びました。

その要旨は、「四種蔵」(『理趣釈』によれば)、

- ①すべての有情は「如来蔵」(如来になる本性)をもともと蔵している、大円鏡智。(普賢客員准教授(金剛薩埵准教授)の境地)。

- ②すべての有情は「金剛藏」(サトリの智慧という堅固な財宝)をもともと蔵している、平等性智。(虚空蔵客員准教授の境地)。
- ③すべての有情は「妙法藏」(正しい「教法」)をもともと蔵している、妙観察智。(観自在客員准教授の境地)。
- ④すべての有情は「羯磨藏」(大悲の「利他行」)をもともと蔵している、成所作智。(毘首羯磨菩薩(ヴェインシュヴァ・カルマン)、金剛業客員准教授、虚空蔵客員准教授の境地)。

講座の最後に、「金剛」自在の、それ自体が真実の「怛唎(とり、ちり)」という真言(「外金剛部」の護法善神の種字)が、「外金剛部」のヒンドゥーの神々の客員講師によって説かれました。

「有情」とは、原語は「sattva 薩埵」で、「有」「存在」「実在」、「本質」「性質」、「精力」「生气」、「決心」「精神」、「勇気」「善」、「生命」「実体」「実在物」などの意味。仏典では「衆生」「有情」「人」「生物」「動物」など(『梵和辞典』)で、ほとんど「衆生」「凡夫」と同義であるが、具には「有ること」に執着する煩惱具足の人間のこと。

●第十三講座:「四摂法」(七母女天客員講師の境地)について

講師:七母女天客員講師

この講座は、七母女天客員講師がすべての衆生を引き寄せ(「鈎召」)、(曼荼羅に)引入し(「摂入」)、(煩惱を)よく殺し(「能殺」)、サトリを得させること(「能成」)、すなわち「四摂法」を学びました。

『理趣経』によく出てくる「調伏」という折伏・化導の具体的方法がここで説かれました。仏教の護法善神となったヒンドゥーの神々が、自分がかつて経験した仏教による「調伏」方法を説きます。

七母女天客員講師は、「梵天妃(梵天母) brahmī」、「嬌吠哩(俱吠羅天母) kauverī」、「嬌麼哩(竜子天母) kaumārī」、「勞捺哩(暴悪天母) raudrī」、「左閻拏(閻魔天母) yāmī, cāmuṇḍā」、「吠瑟拏微(毘紐天母) vaiṣṇavī」、「印捺哩(帝釈天母) aindrī」といった女神たちで、敵対する者をことごとく滅ぼす、「サブタ・マートリカー」と言われるインド神話最強の女神軍団です。

その要旨は、「四摂法」、

- ①「鈎召 bha」:先が鈎状に曲がった鉄棒で衆生をひっかけ引き寄せる=勧誘=布施
- ②「摂入 ya」:引き寄せた衆生を受けとめ曼荼羅に引入する=導入=愛語
- ③「能殺 ū」:そこで煩惱をよく止滅させる(殺傷する)=殺傷=利行
- ④「能成 a」:仏の世界でサトリを得させる=成就=同事

「鈎召」「摂入」「能殺」「能成」は、ヒンドゥーの鬼神が獲物をとる時の方法とその順序で、これを「布施」「愛語」「利行」「同時」と仏教化したのが「四摂法」です。

講座の最後に、七母女天客員講師が、仏の御足に頂礼し、(金剛鈎印ですべての衆生を)鈎召し、(曼荼羅に)摂入し、(煩惱を)よく殺し、よく(サトリを)成就することを「本誓」とする、(それ自体)真実の、「毘欲(びよー)」という真言(七母女天客員講師の種字、「四摂」bhyo=bha・ya・ū・a)を学長に献じました。

●第十四講座：「一切(諸)法」の平等・超言語・虚空(三兄弟天客員講師の境地)について

講師：三兄弟天客員講師

この講座は、三兄弟天客員講師が仏に献じた真言「薩嚩二合(さぼー)svā」が、「一切(諸)法」(事物・事象・心理・心象など私たちの認識対象の、かたちや性質など属性)の「平等」・「超言語」・「虚空」を意味することを学びました。

三兄弟天客員講師は、ヒンドゥーの神「梵天 brahmā」・「那羅延天 nārāyaṇa = ヴィシュヌ神 viṣṇu」・「摩醯首羅(大自在)天 maheśvara = シヴァ神 śiva」で、ヒンドゥーの神々を代表する三大神。「トゥリ・ムールティー」(「三神一体」)でも知られ、「創造」「維持」「破壊」の神とされています。

その要旨は、

「薩嚩二合(さぼー)svā」：「svā」を三つに分け「sa」「vā」「a」とします。

- ①「sa」=「satya」(真実) = 一切(諸)法の「平等」= 金剛薩埵 = 「梵天」(ブラフマー神)。
- ②「vā」=「vāc」(言語) = 「超言説」= 虚空蔵 = 「那羅延天」(ヴィシュヌ神)。
- ③「a」=「ākāśa」(虚空) = 「如虚空」= 観自在 = 「摩醯首羅(大自在)天」(シヴァ神)。

講座の最後に、三兄弟天客員講師が、仏の足に頂礼し、自らの真言「薩嚩二合(さぼー)」をビルシヤナ学長に献じました。

●第十五講座：「四波羅蜜」(四姉妹天客員講師の境地)について

講師：四姉妹天客員講師

この講座は、四姉妹天客員講師のサトリの境地である「常」・「楽」・「我」・「浄」の「四波羅蜜」を学びました。

四姉妹天客員講師は、「惹耶(ジャヤー)jayā」、「微惹耶(ヴィジャヤー)vijayā」、「阿耳多(アジター)ajitā」、「阿波羅爾多(アパラージター)aparājitā」です。

その要旨は、「四波羅蜜」、

- ①「常」：サトリの境地は永遠に常住不変である。「惹耶(ジャヤー)」(金剛波羅蜜菩薩の境地)。
- ②「楽」：サトリの境地は世間の苦を離れ絶対的な安楽である。「微惹耶(ヴィジャヤー)」(宝波羅蜜菩薩の境地)。
- ③「我」：サトリの境地は自我を離れ仏性を本性とする。「阿耳多(アジター)」(法波羅蜜菩薩の境地)。
- ④「浄」：サトリの境地は煩惱を離れ清浄である。「阿波羅爾多(アパラージター)」(羯磨波羅蜜菩薩の境地)。

講座の最後に、四姉妹天客員講師は自ら「哈(かん)」という真言(四姉妹天の種字)(一切法因不可得 ha・一切法我不可得 ma)を学長に献じました。

●第十六講座：サトリの智慧の特性「四種性」(学長ビルシャナの境地)について

講師：無量無辺究竟如来の境地に入った学長

この講座は、ビルシャナ学長が説く般若波羅蜜多(サトリの智慧)の特性である「四種性」を学びました。

その要旨は、「四種性」、

- ①「無量」：般若波羅蜜多は(時空を越えて)「無量」の故に、一切の如来は(時空を越えて)「無量」である。(金剛学部)。
- ②「無辺」：般若波羅蜜多は「無辺」の故に、一切の如来は「無辺」である。(宝学部)。
- ③「一性」：「一切(諸)法」(観念的に保持される、あらゆる認識対象の)特性(属性)は「一性」(法性)の故に、般若波羅蜜多は「一性」(法性)である。(蓮華学部)。
- ④「究竟」：「一切(諸)法」は「究極」の故に、般若波羅蜜多は「究極」である。(羯磨学部)。

●第十七講座：「五秘密」(学長ビルシャナの境地)について

講師：得一切秘密法性無戲論如来の境地に入った学長

この講座は、ビルシャナ学長がこのセミナー全体を総括して説いた「大慾」・「大楽」・「大菩提」・「摧大力魔」・「遍三界自在主」の「五秘密」を通して、私たちの現実世界の「一切(諸)法」が本性は「清浄」あり、そのまま如来の「法性」「法如」の世界であること、すなわち煩惱は「菩提心」に、生死は「涅槃」に転ずることを学びました。

その要旨は、「五秘密」、

- ①「大慾」：煩惱による欲望ではなく、「菩提心」に基づく衆生を済度せずにはいられない「清浄」な慈悲愛護の意欲(欲金剛特任准教授の境地)。
〔菩薩という勝れた智慧もつ者は、乃至生死を尽くすまで、常恒に衆生の利益(利他行)を行い、そして涅槃には趣かない〕(「百字偈」第一句)。
- ②「大楽」：煩惱による快樂ではなく、「清浄」な大慈悲・愛護にもとづく菩薩の境地での絶対的な「安楽」(触金剛特任准教授の境地)。
〔般若及び方便の智慧により(衆生を)救済して悉く加持し、諸法(一切の法)と諸有(一切の有情)をすべて清浄にする〕(「百字偈」第二句)。
- ③「大菩提」：「一切如来」のサトリ(=「五智」)(金剛薩埵准教授の境地)。
〔慾など、世間(の垢)を調伏し清浄ならしめ、有頂天から(地獄などの)悪趣まで、悉く諸有(一切の有情)を調伏する〕(「百字偈」第三句)。
- ④「摧大力魔」：仏法に従わない邪魔外道を「忿怒」行によって「調伏」する降魔の力(愛金剛特任准教授の境地)。
〔蓮花がもとの色に染まっていて、垢れの染めるところとならないが如く、諸慾の本性も然りで、(垢れに)染まることなく生あるものを利益する〕(「百字偈」第四句)。
- ⑤「遍三界自在主」：「欲界」・「色界」・「無色界」の「三界」すべてを「調伏」した自由自在の境地(慢金剛特任准教授の境地)。
〔絶対的な慾が清浄を得て、絶対的な安楽と富饒が、三界において自在を得、よく堅固な利行を行うのである〕(「百字偈」第五句)。

Ⅲ 讃歌合唱

- 十七の講座が終了したあと、全員が大摩尼殿のような大音楽堂に集まり、学生たちのカレッジオーケストラが交響曲「般若理趣」(第一楽章「愛欲の矢」、第二楽章「金剛なる薩埵」、第三楽章「清浄の心」、第四楽章「大楽」)を奏で、第四楽章の次なる「讃歌」を混声合唱団とともに全員が合唱しました。

善きかな、善きかな、すぐれて堅固なる薩埵(金剛薩埵)(金剛部)よ、
善きかな、善きかな、(世間の精神的・身体的(な相対的)安楽を超えた)絶対的な
安楽(宝部)よ、
善きかな、善きかな、大乘(の正しい教説=理趣経)(蓮華部)よ、
善きかな、善きかな、(大悲利他・自他平等の)すぐれた智慧(羯磨部)よ、
善きかな、能くこの(理趣経の)教説を説き、金剛の(ように堅固な)(密教)経典
(金剛乘)を加持すること(仏部)よ。
この最勝の教王(理趣経)を持する者は、一切の諸魔も破壊はできず(金剛部)、
仏・菩薩の最勝の境地を得て、諸々の成就に於いてまさに速やかである(宝部)。
一切如来及び菩薩は、ともに、このように勝れた教えを説き終り(蓮華部)、
(理趣経を)持する者をして悉く成就せしめんがために、皆(金剛手菩薩ほかの)諸菩
薩及び諸天衆大いに歓喜し、信じ、受けとめ、実践するのである(羯磨部)。

- 次いで学長から今回の特別セミナー「般若理趣—愛欲は菩薩の心位—」の総括として「百字偈」の朗読があり、『理趣経』とは、人間の本来的な生命の営みである「愛欲」を否定せず、密教の菩薩の心位からは「(本来)清浄」であり「大楽(相対を超えた純粹で絶対的な安楽)」だと説いたものであり、世間の一部で言われるようなセックスを説いた性典ではないことが明らかにされました。

【百字偈】

菩薩という勝れた智慧もつ者は、乃至生死を尽くすまで、常恒に衆生の利益(利他行)を行い、そして涅槃には趣かない。

般若及び方便の智慧により(衆生を)救済して悉く加持し、諸法(一切法)と諸有(一切有情)をすべて清浄にする。

慾など、世間(の垢)を調伏し清浄ならしめ、有頂天から(地獄などの)悪趣まで、悉く諸有(一切の有情)を調伏する。

蓮花がもともとの色に染まっていて、垢れの染めるところとならないが如く、諸慾の本性も然りで、(垢れに)染まることなく生あるものを利益する。

絶対的な慾が清浄を得て、絶対的な安楽と富饒が、三界において自在を得、よく堅固な利行を行うのである。